

公立小学校における英語活動について⁽¹⁾ (2)

—外国人補助教員とのチーム・ティーチングの分析—

アレン玉井光江*

Abstract

This is a continuation of the research reported on in a paper published last year in this bulletin. The present paper discusses the role of Assistant Language Teachers (ALT hereafter) and team teaching. The team teaching of 2 fourth-grade classes and 2 fifth-grade classes was analyzed. Although the curriculum, the teaching materials, the ALT, and the classrooms were the same in all of the four classes, the actual classes turned out to be completely different because of the relationships between the ALT and each homeroom teacher and the way each homeroom teacher conducted the class.

Key Words : English activities, elementary school, Assistant Language Teacher

I はじめに

平成14年度より施行された学習指導要領により公立小学校では新しく「総合的な学習の時間」が創設され、その時間で取り組むテーマは各学校で決めることとなった。この動きは、長く続いた中央集権的な教育制度の中で初めて学校、または教師の自治権 (autonomy) が認め

Analysis of English Activities in a Public Elementary School (2)

—Team Teaching with an Assistant Language Teacher—

* Mitsue Allen-Tamai

(1)本研究は平成14年度文京学院大学共同研究として行われた。

Correspondence Address : Faculty of Human Studies, Bunkyo Gakuin University,
196 Kamekubo, Oimachi, Iruma-Gun, Saitama 356-8533,
Japan.

Accepted October 9, 2002. Published December 20, 2002.

られたものと評価できる。新設された「総合的な学習の時間」で、取り扱うテーマとして環境・福祉・情報・国際理解などが文部科学省より助言された。そのうち、国際理解教育の目的は下記のように表現されている。

1. 広い視野を持ち、異文化を理解するとともに、これを尊重する態度や異なる文化を持った人々と共に生きていく資質や能力の育成を図ること。
2. 国際理解のためにも、日本人として、また、個人としての自己の確立を図ること。
3. 国際社会において、相手の立場を尊重しつつ、自分の考えや意思を表現できる基礎的な力を育成する観点から、外国語能力の基礎や表現力などのコミュニケーション能力を図ること。

したがって、今年度より始まった「総合的な学習の時間」の中での英語活動は、あくまでも国際理解教育の枠内で、その目的は、異なる文化をもつ人々とコミュニケーションをとろうとする態度育成にある。

しかしながら、経済界などからは「英語ができる」人材育成を求める声は大きく、また国際語としての英語の重要性などから「国際理解教育」＝「英語教育」と解釈されることも多い。現場では「総合的な学習の時間」において英語学習が行われている場合も多いのではないかと思われる。学習指導要領に、「外国語会話」という表現はあるが、「英会話」という表現は出てこない、にもかかわらず文部科学省は平成13年に「小学校英語活動実践の手引き」というものを発刊している。平成13年度より、全国5つの小学校で「英語科」の実験も行われている。政府内にはこれからの公教育における早期英語教育に関して、最終判断がでていないように見受けられる。国としての統一見解は出ていないものの、現場の反応は、平成14年度、公立小学校において英語活動を導入した学校は全体の40%に上り、(松畑：2002)、この数は伸びるのではないかと考えられている。

このような状況下、本論文は昨年に引き続き、公立小学校での英語活動の授業分析を試みる。昨年度の論文において「授業を分析した結果、残念ながら、国際理解教育の一環として行われるはずの英語活動は、コミュニケーション能力を発達させる目的に対して不十分なものであったことを指摘しなくてはいけない。」(アレン玉井・小川・柄田：2001)と結んだが、今年度改めて、ALTとのTeam Teachingからみられる英語活動という観点から英語活動の実態を報告し、また展望について述べたいと思う。

II 研究方法

2-1 研究目的

公立小学校の英語活動において外国語指導助手(これ以降、ALTと示す)の果たす役割について、または学級担任とのteam teachingについてその現状を調べる。

2-2 研究サイト

授業研究をした A 小学校は東京都内の閑静な住宅地にあり、開校100年の歴史をもつ。在校生の50%は学区外から通学し、彼らの多くは私立中学へ進学する。各学年3クラス、または4クラスあり、この地域では大規模な小学校である。

A 小学校は、平成9年度より3年間、文部省指定の研究校として、「国際社会に生きる児童の育成ーコミュニケーション能力の育成をめざしてー」という研究主題の下に研究に取り組んだ。また、平成12年度は更に1年間研究開発校として英語の文字教育に、取り組んだ。この学校では、研究のねらいを「世界の人々から信頼され尊敬される日本人として、進んで国際社会に参加し協力できる能力や態度を育成するとともに、心豊かに自己を確立し世界の人々と共生していく意識を高め、豊かな表現力・コミュニケーション能力の育成を図る」としている。この小学校では、地域協力者という形で保護者（母親）が国際科活動に参加している。

2-3 研究参加者

今回はALTとの Team Teaching を重点的に分析した。この研究の対象となったのは、A小学校でALTとして英語活動の指導に加わっているアメリカ人男性、また彼とチームを組んで授業を行った4年生担当女性教諭2名、また5年生担当の女性、男性教諭各1名、合計5名が行った授業である。それぞれ、クラスには40名ちかくの生徒が在籍していた。

表 1 : 参加者

名前	担当クラス	性別	年代
W	4 A	女	30代後半
X	4 B	男	40代前半
Y	5 A	女	30代前半
Z	5 B	女	50代前半

2-4 データ収集方法

A 小学校の校長より英語活動を研究するにあたり授業見学の承諾を得、3年生以上の英語活動を平成14年6月、7月に見学し、またビデオ撮影を行った。

III データ分析

ALT との Team Teaching の実態を調べるため、今回収集したデータのうち、4年生2クラス、および5年生2クラス、合計4クラスの授業を分析する。

3-1 全体的な授業の流れ

まずはそれぞれのクラスの全体的な流れを下の表で報告する。この表から主な活動ごとにとどれほど時間が使われていたか、また誰が主導権を握って授業を行っていたのかが明らかになる。

表1 4年Aクラス (W教員)

時間配分	主導権のある教師	活 動
7分		児童が教室に入り、授業が始まるが、機械が故障したためALTと担任が共同でそれを直そうと試みる。担任は一度教室をでて新しい機械を持ってこようとする。
3分	ALT	担任不在のままALTが今日導入予定の英語表現を紹介する。
2分	ALT+担任	担任が戻って、機械が使えるようになったので先週のチャンツを復習する。
10分	ALT+担任	今日の英語表現を担任とALTでモデルを提示し、生徒はそれを復唱する。その後手の上がった生徒とALTが会話し、モデル会話の理解を深め、最後に生徒同士で会話させる。
2分	ALT+担任	違う単語を使い、同じ構文を練習する (Substitution Drill)。
8分	ALT	新しいチャンツの導入。
4分	担任+ALT	担任がゲームのルールを日本語で説明した後、担任とALTでモデルを示す。
6分	担任+ALT	モデル文を含む今日の表現をグループ活動で定着させる。
3分	ALT	新しい歌をALTが歌う。

表2 4年Bクラス (X教員)

時間配分	主導権のある教師	活 動
3分		児童が英語教室に入ってくる。児童は指定された場所で座る。
1分	ALT	挨拶した後、チャンツの復習。
3分	ALT	カードを使って今日の英語表現に必要な単語を紹介する。
2分	ALT	新しいチャンツの導入。
24分	ALT	単語の復習。 ALTと地域協力者がモデル会話を提示、生徒は会話を復唱。 ALTと協力した児童とのモデル会話を残りの生徒は復唱。 児童同士がモデル会話を言う。
9分		モデル会話を使ったグループ活動。
3分	ALT	担任の要求にしたがって最後にモデル会話を生徒に復唱させる。

次に5年生の児童を対象に行われたALTとのTeam Teachingをみていく。先ほどと同様にそれぞれの活動の時間配分、主導権を握る教師、活動の簡単な内容を表にまとめてみた。

表3 5年Aクラス(Y教員)

時間配分	主導権のある教師	活 動
6分		児童が英語教室に入ってくる。児童は指定された場所に座る。
8分	担任	BINGOの原曲と替え歌をうたう。
7分	担任+ALT	今日導入する英語表現のモデルを担任とALTが示す。
6分	担任	クラスを二つに分け、導入した英語表現を使ってゲーム。
3分	担任	全体で練習した後、導入した英語表現をペアで練習。
5分	担任	グループになって行うゲームの説明。
6分	ALT+担任	ルール説明をしたグループ活動
2分	担任	活動のまとめ。
2分		音楽に合わせて児童が英語教室を出て行く。

表4 5年Bクラス(Z教員)

時間配分	主導権のある教師	活 動
5分		児童が英語教室に入ってくる。児童は指定された場所に座る。
5分	ALT	挨拶のあとBINGOの歌。
5分	ALT	BINGOの原曲と替え歌をうたう。
4分	ALT	体の調子を表す英語表現をカードを見せながら復習する。
2分	ALT+担任	今日導入する英語表現をALTとともにモデルを示す。
2分	ALT	手をあげた生徒を参加させてモデル表現を練習する。
5分	担任	クラスを二つに分け、導入した英語表現を使ってゲーム。
6分	担任	全体で練習した後、導入した英語表現をペアで練習。
9分	ALT+担任	グループでの英語表現の練習。
2分		音楽に合わせて児童が英語教室を出て行く。

3-2 授業計画表

上記の表では比較が簡単なように重要な活動を書くだけにしたが、担任の先生がもっていた英語活動指導案には次のように示されていた。

学習活動	☆留意点	●準備する物
1. はじめのあいさつをする		
2. What's the matter?を歌う。	●テープ	What's the matter?
3. 「長い」「短い」「新しい」「古い」の言い方を練習する。 long, short, new, old.	●絵カード (文房具, 服など) ☆長い・短い, 新しい・古いがはっきりわかる絵を用意する。	
4. チャンツ The Animal Chant をする。	●テープ	The Animal Chant
5. 「～ですね」の言い方を練習する。 T1: It's long, isn't it?	●絵カード (文房具, 服など)	

T2: No. it isn't. It's short.

☆最初指導者が見本を示し、次に2グループに分かれ、質問と答えを言いその後ペアで練習する。

6. 「どんな鉛筆もってるの？」ゲームをする。

ルール (1) 4種類の鉛筆を用意する。

- ・ old and long pencil
- ・ new and long pencil
- ・ new and short pencil
- ・ old and short pencil

●鉛筆4種類 児童1人1本

(2) 児童は、一人一本鉛筆を持ち、教室を自由に歩く。ただし、鉛筆を人から見えないように隠して持つ。

(3) 出会った友達と会話する。

C1: I have a pencil.

C2: It's long, isn't it?

C1: No. it isn't. It's short.

C2: It's new, isn't it?

C1: Yes, it is. It's new.

(4) 同様に繰り返す。

●テープ Muffin man.音楽がなったらゲームをやめる。

7. I'm a Little Teapot.を歌う。

8. おわりのあいさつをする。

次に5年生の授業プランであるが、さきほど分析した4年生の授業より、実は構文的にも5年で取り扱われていた英語材料の方が簡単であった。活動の詳しい内容は下記のようなものである。

学習活動	☆留意点	●準備する物
1. はじめのあいさつをする		
2. BINGO を歌う。		●テープ BINGO
3. 国名が5つのアルファベット文字でできている国を探し、その国名を使い BINGO の替え歌を歌う。(Japan, Korea, China など)		
4. 学習した体の調子の表現を復習。		●絵カード (sick, tired, sad, angry, surprised, happy)
5. 体の調子を尋ねるモデル会話の導入。 T1: How do you feel today? T2: I feel (happy など).		☆最初指導者が見本を示し、次に2グループに分かれ、質問と答えを言い、その後ペアで練習する。
6. 「どんな調子？」ゲームをする。		
ルール		
(1) クラスを二分し、対峙して座る。		

- (2) それぞれのグループの後ろに先生が立ち、カードを相手側に見せる。
 - (3) A側が How do you feel? とたずね、同時に先生が出すカードを見て、表情でその内容を相手のチーム（B側）に示す。
 - (4) BはAの表情を読み、I am…と答える。
 - (4) モデル会話の練習をする。
7. 「どんな調子？」ゲームをグループで行う。
 児童は5～6人のグループになり、再びジェスチャーゲームをする。正解した児童はカードをとることができる。

●テープ Muffin man. 音楽がなったらゲームをやめる。

8. おわりのあいさつをする。

3-3 各教師の行動分析

次に4年生、5年生とも活動の主体になった先生が担任であったか（4A, 5B）、ALTであったかで（4B, 5B）授業運営、また授業の雰囲気が大きく違っていた。ここではALTとの関わりという観点からそれぞれの先生に見られる特徴を分析するが、担任主導で行われた度合いが強い順、4A, 5B, 4B, そして5Bの順番で提示する。

3-3-1 Y教諭

20代後半と思えるこの女性教員はA小学校に転勤して2年目であり、英語活動にかかわるのも2年目である。授業全体を通して積極的に英語で児童に話しかけ、立つ位置も教室の中央部分で授業は完全にこの女性教師中心に行われていた。ALTがいても、ALTに頼らず、彼をヘルプ役につけ、あくまでも担任主導型で授業を進行していった様子は次のような言動で理解できる。

(A) 児童の反応を促し、授業の進行を促すうえで主導権を握る場面。HRは学級担任を示す。

(A-1) ALT: How do you feel? (と一人の児童に問い掛ける)

HR: 日本語でもいいから答えてごらん。

この児童は英語で問いかけられたが、とっさに英語では答えることができなかった。そこで解答に困っている児童の反応を促し、クラス全体がテンポよく動くように指示を出している。

(A-2) HR: はい、ここで分かれましょう。(子どもを2グループに分ける)

(A-3) HR: それではこれからルールの説明をします。

やはりクラスのテンポを守りながら活動がスムーズに展開できるように児童のグループ形態を変える指示を出したり(A-2)、日本語でルールの説明をしたり(A-3)する。

(A-4) HR: (テーマ音楽を流し、活動をとめる。)(2回)

この学校では、英語活動を行うとき、それぞれの学年でテーマソングのようなものを決めておき、ペア活動、またはグループ活動を終えさせるときに、その曲をかける。児童は、このルーティン化した決まりを守り、自然に自分の席に戻る。

(A-5) HR: ゲームに勝った人の国を聞きましょう。みんなで Where are you from? ときます。

これは、その日に行った2番目のグループ活動のまとめにあたるものである。グループごとにゲームをさせ、勝者は児童各々があらかじめ用意し、持参していた国旗をもらうことができる。ゲームを終了させ、その国旗を一番たくさん集めた児童を全員の前で誉め、前回に導入した英語表現 Where are you from? を使ってまとめをした。

(A-6) HR: Today's class is over. Thank you.

これは授業の最後のことばであるが、Y 教員は授業の始めから終わりまで、授業進行の指示はすべて英語もしくは日本語で出した。

次に他の教員と違い、Y 教員は英語を教えるときも主導権をもっていた。

(B) モデル文を提示するときには主導権を握る場面。

(B-1) HR (ALT を指す): How do you feel today?

ALT: I feel hot.

(B-2) HR: じゃあ Bill 先生とやってみます。

ALT: Hello, Keiko-sensei. How do you feel?

HR: I feel happy. 地域協力者, How do you feel today?

(地域協力者3名に同じ質問を繰り返す、児童にモデル文の理解を促す。)

4年生、5年生ともに見学した授業は総合的な学習の時間内の英語活動であるはずだが、英語の表現を定着させ、英語の技能を高めようとした授業になっていた。そのような授業形態の中ではモデル文を提示することは授業の最も重要なところになる。この2例でわかるようにY 教諭の場合は、モデル文を提示するときも自らが中心となり ALT を、答えの側に回すか (B-1)、授業の流れの説明を日本語で行い、そのあとそれをすすめる役目 (B-2) を果たしていた。

3-3-2 W教員

W教員は、授業の初めに CD プレーヤーが故障するというアクシデントがあったが、その問題が解決した後は、ALT と共にモデル文を紹介したり、生徒に英語で指示語を出したりして、積極的に授業を進めていた。

(A) 授業を進める上で主導権を握る場面。

(A-1) HR: 今から1本ずつ鉛筆を配りますが、相手に見せないで当ててもらいましょう。

(A-2) HR: Do you have a pencil? Stand up. Let's start the game.

ここでは、その日に用意されたゲームを進めるためゲーム説明を日本語で行い (A-1)、ゲ

ームをするのに必要なモデル文を練習した後、改めて鉛筆を持っているか確認をし、ゲームを始めるように英語で指示を出している（A-2）。

（A-3） HR：（テープを流して活動を終了させる。）

3-3-3 Z 教員

Z 教員の授業では、授業開始後20分ぐらひはすべて ALT が主導権を握り授業を進めていたが、授業全体の流れを決めるゲーム導入、グループ活動の始まり、終わりの際は主導権を握り授業運営をしていた。

（A） 授業を進める上で主導権を握る。

（A-1） HR：じゃあね。今度は2つに分かれてみよう。

（A-2） HR：じゃあ、前を向いて今度は1人1人やります。

（A-3） HR：OK. それではみなさんでやりましょう。グループに分かれます。

ここでは ALT が中心になって導入したモデル文を全体、もしくはグループで練習する時、クラスを二つに分けてゲームの説明を日本語で行い（A-1）、それが終わった段階で生徒一人一人に質問し（A-2）、モデル文の理解が十分行き届いた段階でグループ活動に移した（A-3）。

3-3-4 X 教員

X 教員の場合は英語活動の時間中、生徒の前には立たないで生徒の後に座っていた。したがってモデル文の導入は ALT と地域協力者が行い、ゲームの説明も ALT が英語ですべて行っていた。X 教員が行った指導的な行動はテープを流し、活動を終了させたこと（A-1）と、その後 ALT にモデル文をもう一度復唱させるように指示したことである（A-2）。

（A） 授業を進める上で主導権を握る。

（A-1） HR：テープを流し活動を終了させる。

（A-2） HR：Repeat once more.（ALT に対しての指示）

X 教員は、授業中主導権はとらなかったが、ALT の質問に答えた生徒の後、大きな声で復唱することで残りの生徒を復唱するように導いたり、ALT の質問に答えられない生徒に答えを教えたり、注意力が欠けてきた子どもの近くに座ったりして円滑な授業運営ができるようにしていた。

3-3-5 ALT

A 小学校で ALT を勤めるのは30代前半のアメリカ人男性であるが、彼はA小学校の1年生から6年生すべてのクラスの英語活動に参加している。この学校では斡旋業者に外国人講師の派遣は委託している。今年度 ALT は朝 8 時30分より（火曜日を除く）登校し、水曜日以外は5校時まで授業を受けもち、月曜、火曜、金曜は放課後まで滞在する。仕事の内容としては(1) ALT として英語活動に参加、(2)各学年の先生との打ち合わせ、(3)職員への英語レッスン、(4)

クラブ活動の指導, (5) English Time のあいさつ出演, (6) 児童朝会の参加などがある。英語活動の毎週の大体のスケジュールは, 事前に国際科担当が各学年と相談のうえ取りまとめ, 拡大したものを職員室に掲示していることになっている。

IV 考 察

4名の教員の Team Teaching を分析した結果, 同じカリキュラム, 教材, 教室, ALT と多くの外的要因が固定されているにもかかわらず, かなり異なる授業が展開されていることに驚いた。ALT の存在をどのように授業に反映させるのかによって授業が大きく違ったものになっていた。授業後に ALT にインタビューすると彼も個々の先生の違いを心得ており, それぞれの先生の授業スタイルにあわせているようである。しかしながら ALT が中心になって授業が行われたクラス 4B, 5B においては, 当然のことながら生徒はネイティブの話す英語を聞く機会に恵まれた。また彼らがネイティブの指示する英語を聞こうと真剣に取り組む様子が見られた。下に示す英語は, 5年生の ALT 主導のクラス (4B) においてのみ聞かれた英語である。

(1) 挨拶のあと歌を歌う活動において次のような英語の指示がでた。

ALT: We're going to start the class with a song. Stand up. Let's sing "BINGO."

(2) BINGO の5つ文字の代わりに5つのアルファベット文字でできている国名を探すという活動では, 次のような簡単な英語で説明した。

ALT: What country? With five letters?

この際, 担当の教員が CHINA と書くところを CHINE と書いたところ, 生徒がその誤りを指摘し, ALT は静かに誤りを訂正していた。

(1) 体の調子を表すカードを見せて, それを表すジェスチャーをするよう指示。

ALT: Repeat and do the gesture.

(2) モデル文を定着させるために生徒の協力者を求める。

ALT: I need a volunteer.

4年生の ALT 主導のクラスにおいては, 5年と同様挨拶とその後の歌の活動において

(1) ALT: We're going to start the class with a song. Stand up.

(2) 新しいチャンツを導入する前と1度聞かせた後

ALT: Let's do animal chants. First, just listen.

ALT: Do you know giraffes? Do you understand? Giraffe?

(3) 様々な指示語

ALT: Look at the pencils.

ALT: I need somebody to do the demonstration.

ALT: I need a volunteer.

ALT: Now, I need two volunteers.

ALT: Now, we're going to play a game. Does anyone have a pencil? OK? Go.

以上のような指示語を生徒たちは状況の中から推測し、理解していた。また ALT も自分が中心になるクラスにおいては様々な工夫をこらし、楽しそうで、同一人物かと思うほど活気にあふれていた。

ALT が中心になるクラスのほうが英語のインプットという面からすると学習者にとって利益があると考えられる。しかしながら、基本的には A 小学校においては年間の 3 分の 2 の英語活動が学級担任によって行われ、残りの 3 分の 1 が ALT との Team Teaching になっている。そうすると Y 教員のように ALT と組んでも常に中心的な存在として英語活動を展開できる先生のほうがよいかもしれない。

Team Teaching を行うにあたり、担任と ALT との関係を考えながら、どちらが主導権を握るべきかというのは難しい問題である。しかしながら、この問題と関連して ALT の役割を考えると、現場がもっと問題にすべきことは ALT を十分に活用した授業プランが用意されていたかどうかである。この A 小学校に勤める ALT のように 1 つの学校で 1 年から 6 年の全クラスを担当する場合、子どもの名前を覚えることはほぼ不可能であろうし、子どもの日常生活、もしくは興味・関心について把握するにも限界があると思われる。また A 小学校でもそうであるように、ALT が最初からカリキュラム作成に加わることは珍しい。このような場合往々にして ALT がテープレコーダー代わりに使われることが多い。残念ながら A 小学校の授業でもこのような傾向が見られた。しかしながら、これは A 小学校だけでみられる問題ではなく、10 年以上 ALT との授業を行っている中学校以上の英語の授業においても指摘されつづけている問題点である。理想から言えば、担任が中心となりつつも、ALT を巻き込んで、より言語的に豊かな授業を展開することが望ましいし、またそのような授業を可能にするカリキュラム開発は重要である。

V まとめ

本論文では公立小学校で実践されている英語活動を分析し、ALT との Team Teaching という観点から議論をすすめてきた。ALT との Team Teaching の授業を分析し、同じカリキュラム、教材、ALT、教室と多くの外的要因が共通であるにもかかわらず、展開されていた 4 つの授業は大いに異なるものであった。

実態調査をすることがその研究目的であるが、まとめにあたり上記のような議論を踏まえ、公立小学校で行われる英語活動に適したカリキュラムの基本的な考え方を示唆したい。今回の授業分析の結果、英語活動の時間が、英語の表現を教える授業へと変身し、安易に英語という

外国語が吟味されないまま児童の前に提示されている感を強くもった。その授業展開には小学校の担任ならではという工夫をみつけることが難しかった。

現段階では、公立小学校での英語活動は「総合的な学習の時間」内の「国際理解教育」という枠組みの中で行われることとなっている。カリキュラムの中には児童の日常生活を良く知っている小学校の担任教師だからこそ発見できる観点が含まれるべきである。全教科を担当し、子どもの日常を深く理解している小学校教員の特色が十分に生かされるべきである。カリキュラムを作成するにあたり、(1)授業で取り扱うトピックを言語材料から選択していくのではなく、担当する子どもの日常生活、興味、関心などから選択すること、また(2)他の教科との関連を重視し、トピックを選択することが非常に大切になってくる。

公立小学校での「英語科」設置の議論も起こり、前述したように既に全国で5校の小学校ではその実験が行われている。千葉県成田市の小学校では音楽・体育を英語で行うことを決定している。この先、今まで以上に小学生を取り巻く英語教育環境は著しく変化していくことが予想される。時代の流れに翻弄されることなく、第一言語である国語教育とともに、言語教育の観点から、英語が一つの言語として、形だけではなく生きた言語として導入され、授業が展開されるように期待したい。

文 献

1. アレン玉井光江・小川仁・柄田毅 (2001) 「公立小学校における英語活動について(1), 『文京学院大学研究紀要, 第3巻第1号』 p. 87-99
2. 松畑熙一 (2002) 第41回 JACET (大学英語教育学会) 全国大会, 全体シンポジウムにおける口頭発表